

Newsletter 43

慶應義塾大学教養研究センターニュースレター第43号/2023年11月30日発行

Contents

巻頭言	教養と英語
特集Ⅰ	「基盤研究」「学習相談」
特集Ⅱ	「情報の教養学」「研究の現場から」
特集Ⅲ	【教養研究センター 実験授業／設置科目】 庄内セミナー／日吉学／生命の教養学／エンターテインメントビジネス論 身体知
特集Ⅳ	「日吉行事企画委員会（HAPP）企画」
特集Ⅴ	「日吉キャンパス公開講座」「読書会」「みなさんmiraiプロジェクト」
活動予定	
私の〇〇自慢	



教養研究センター 山下一夫副所長

教養と英語

教養研究センター副所長
山下一夫（理工学部）
Kazuo Yamashita

小学館の『日本大百科全書』で「教養」の項目を引くと、塾員でもある諏訪内敬司氏の次のような説明があります。「人間の精神を豊かにし、高等円満な人格を養い育てていく努力、およびその成果をさす。とかく専門的な知識や特定の職業に限定されやすいわれわれの精神を、広く学問、芸術、宗教などに接して全面的に発達させ、全体的、調和的人間になることが教養人の理想である」。また大学組織に馴染みの深い「一般教養」という言葉を引くと、やはり諏訪内敬司氏の次のような説明があります。「特定の職業や専門の枠を超えて、広く人間として、また社会人としてもつべき知識や技能をさす。生活に直接役だてているという即時的なものではなく、精神を深め豊かにすることを目的とし、人生をより意義深くする観点から主張された」。

どちらも、自分の専門の知識だけではなく、他の分野の知識も持とう、と言っているのがポイントです。大学での学びということで考えると、例えば自分は理工学部だから文学のことは知らないとか、経済学部だから医学のことは興味がないと言うのではなく、専門

外の知識にもきちんと触れて行きましょう、ということになります。またそこからは、例えば自分の専門の関係で英語を勉強した後、色々な国に旅行に行った時に、「世界のどこの国でも英語が通じる」と感じたとしても、そこで一步下がって、「いや、もしかしたら他の分野から見ると違うのかも知れない」というように、「専門」から導き出した「自分の考え方」を、メタな視点から見る態度なども導き出されるでしょう。

またどちらも、単にモノをたくさん知っているだけではダメで、それが人間性の向上に繋がってはじめて教養だと言っています。もちろんそうした言説の背後には、「知識を蓄えれば精神が豊かになり、人間として成長する」という、前世紀の楽観主義的な思想もベースにありますが、しかしこれはとても大切なことです。さきほどの英語の例で言えば、「世界のどこの国でも英語が通じる」から「他の外国語なんか勉強しなくて良い」などといった、「人間性」に疑問符が付くことを言ったらダメなわけです。そういう考えは、英語以外の言語を母語とする様々な国の人々や、英語を学ぶ環境にない人々の存在を否定するだけでなく、自分自身をも精神的に偏狭なあり方へと追い込んでいくからです。

もちろん英語を学ぶことは大切です。しかし最近、どうもおかしな風潮が蔓延しているようにも思います。ここで我々は「教養とは何か」ということを、もう一度考えていくべきでしょう。

基盤研究

教養研究講演会 no.8

「激動の流れを生きて」—ウクライナ戦争を念頭に、今ベトナム戦争を考える—

【講師】 船戸良隆（日本基督教団 勝沼教会牧師）

【企画・司会】 小菅隼人（理工学部教授）

船戸良隆先生は1936年、東京・芝の生まれ、大学生時代、筑豊炭鉱閉山に伴う児童の悲惨な状況に接し「筑豊の子どもを守る会」を結成し、参画しました。1965年3月に東京神学大学大学院修了後、1967年、日本キリスト教協議会より戦時下のベトナムに派遣され、戦災孤児救済に従事しました。1976年には、国際協力基金よりタイ・チュラロンコン大学の日本研究講座講師として派遣され、1979年には、アメリカのプリンストン大学客員研究員を歴任、1990年、NGO法人「アジアキリスト教教育基金」を創立し、「バングラデシュの児童に初等教育を」の専務理事・事務局長に就任しました。2000年、国際協力NGOセンター理事長も歴任されました。

昨年春の小友聡先生（旧約聖書学）、昨年秋の近藤勝彦先生（組織神学）に続き、今回の船戸良隆先生は、実践的な活動としてキリスト教から、アジアを舞台にして救済に従事してきました。その意味で、アカデミズムの立場とは

ちがって、現代のアクチュアルな状況に引き寄せて講演を行いました。ベトナム戦争下、現地の貧困を救う活動の様々な体験、それにかかわる人物の態度についての内容は、聴衆に深い感銘を与え、講演後の質疑応答でも、世界と自分との関わり方、ウクライナ戦争の理由についての見解についての質問・コメントがあり、刺激的なやり取りとなりました。民族の自立と自由への希求を肌で感じた船戸牧師は、最後の司会者からの「私たちは、ウクライナ戦争は早く終わらせるべきだとしか考えませんが、今の先生の文脈で言えば、民族の独立・自由ということから、これは時間がかかっても仕方がないことかもしれない。これからあと2年、3年、10年ウクライナ戦争が続いても、致し方ないことだと先生はお考えですか」という非常に難しい問いにも、はっきりと「わたしはそう思います」と答えてくださいました。そこにも、先生の実体験からくる強い信念を感じた講演会でした。（小菅隼人）



文理接続プロジェクト

2023年度の「文理接続プロジェクト」は、昨年度に続き「エコロジー」という共通テーマを掲げ、毎月1回程度（今年度は全9回）の「文理接続研究会」を行っています。昨年度と同様に、年度末に論考集『接続』への掲載論文を作成することを前提に、希望者が計画発表、中間発表、最終発表などを行い、異なる分野の研究者の間で自由な意見交換や議論が行われています。今年度の新たな試みとして、10月7日と2月23日の二回の研究会を「ワークショップ」として位置付け、発表者全員が来往舎に集まり、丸一日を使って発表と議論を行います。

研究会の活動については随時ブログで公開・更新しており、昨年度の成果である『接続』1号も閲覧できます（<https://lib-arts.hc.keio.ac.jp/bunri/>）。研究会への参加者は基本的に教員と研究者に限定していますが、特に前提知識が必要なわけではないので、どなたでも気軽にご参加いただけます。関心のある方は、ぜひご連絡ください。（荒金直人）

※写真は奥田知明教授（理工学部）の講演「環境化学研究者の取り組み」



学習相談

春学期ということもあり、レポートを初めて書く、という新生の皆さんがたくさん質問をしに来てくれました。自分自身が初めてレポートを書いた時のことを思い出しながらお答えしたつもりです。特に参考文献の書き方を質問していただく機会が多い印象でした。昨年自分自身が受けていた授業を履修している方が相談に来てくれることもあり、そういった方には勝手に親近感を覚え、つつい熱く語ってしまいました。なかでも教授に学習相談をおすすめ

されて来ました、と仰っていた方が印象に残っています。このように学習相談をおすすめしたいと思ってくださる方がもっと増えるような素敵なサービスにしていきたい、ひいては慶應生なら知らない人はいない、というサービスにできればと思っておりますので、今後ともぜひ学習相談をご活用ください！

（佐々木呼子 文学部2年）



情報の教養学（2023年度春学期）

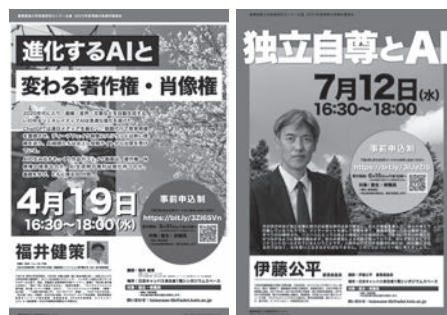
2023年度春学期の「情報の教養学」では、2件の講演を対面で実施しました。まず、福井健策氏（弁護士）は、生成系AIに対する著作権や肖像権の位置づけをとりあげました。2020年代に入ってから、ChatGPTに代表される生成系AIが大幅に進化したことを紹介しましたが、生成系AIは既存の画像、文章、音声などを学習して、学習した結果から“新しい”画像、文章、音声を生成しています。この“新しい”画像、文章、音声は、従来のモノに非常に似ていることがあり、著作権や肖像権の侵害になり得るかを議論しました。

二つ目の講演では、伊藤公平塾長が、2部構成で話されました。前半は、AIの光と影を、例を交えて紹介しました。たとえば、過去の犯罪状況を学習させることにより、警備を強化し、犯罪を減少させた例をとりあげました。しかし、良い面だけではなく、犯罪と関係のない人まで連行されるという負の面を紹介しました。次に、OpenAI CEO

のAltman氏の講演をとりあげ、義塾においてAIを積極的に使える（試行する）構想を述べました。後半は大学の運営に関わる話で塾長のビジョンを話しました。

いずれの講演も参加者は興味深く聴講し、質疑も活発でした。秋学期は、3件の講演を対面で実施する予定です。

（高田真吾）



研究の現場から

「ファン・ホセ・サエール『グロサ』を読む——語り手と読者の関係から」

【日時】2023年5月22日（月）18:15～ZOOM開催

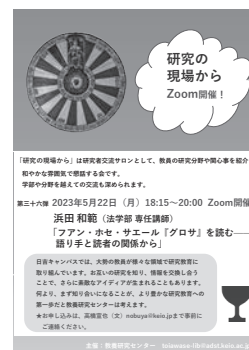
日本でも紹介の進んでいるアルゼンチンの作家ファン・ホセ・サエールの生涯と作品、およびラテンアメリカ文学とアルゼンチン文学の流れを概括したのち、その長篇小説『グロサ』（1986）を、語り手と読者の関係に焦点を当てて読み解きました。

付加疑問文に満ちた、親しい友人相手を思わせるその語り口は、時としてアルゼンチン史の膨大かつ微細な知識を暗黙のうちに要求するかに思えます。しかしながら、作中人物間の絶えざるディスコミュニケーションを観察したとき、語り手の振る舞いは読み手と情動や知識を共有しようとするどころか、むしろその共有の契機を振り切っても衝動的に語り続けずにはいられない一方通行的なものであ

ることが見て取れます。語り手に同意する必要なく半ば不信のうちに付き合いながら、読み手自身も自らの経験を積極的に混ぜ合わせつつテキストの言葉を読み込むことこそ、『グロサ』の理想の読み方ではないかと結論づけました。

報告後は、語り手と読者の関係をめぐる鋭い質問、あるいはすでに邦訳を読んでくださった方からは作品読解のキーワードに関する質問など、すこぶる刺激的な意見交換の場となりました。当初は1月予定だったのが諸事情により延期となつての開催でしたが、おかげさまで偶然にも報告者による邦訳刊行後の開催となり、結果として実に有益でした。参加者の皆様方に深く御礼申し上げます。

（浜田和範）



予告 「研究の現場から」（第37回・38回）

「研究の現場から」は、研究者交流サロンとして、教員に日頃の研究上の関心事について自由に話して頂き、参加者とくだけた雰囲気の中で語り合う催しです。慶應義塾では、多数の教員が様々な領域で研究教育に取り組んでいます。この研究者交流サロンは、普段なかなか知り得ない研究分野の現状を知ることができる場所であるとともに、情報を交換しながら、学部や分野を越えての交流を深める機会でもあります。そこから新しいアイデアが生まれるかも知れません。どうぞお気軽にお集まりください。

（高橋宣也）

- 第37回：12月8日（金）アダム・コミサロフ（文学部）
タイトル：移民の社会的受入れに関するソーシャルマーカー
- 第38回：12月19日（火）橋 宏亮（法学部）
タイトル：未定
- 時 間：各回とも18:15～20:00（予定）（ZOOM開催）
- 申 込：要
- 参加費：無料

※過去の催しはこちらからご覧ください

<https://lib-arts.hc.keio.ac.jp/education/support/series.php>

第12回「庄内セミナー」報告

第12回「庄内セミナー」は8月29日から9月1日まで、5学部1研究科の14名と今回初めて慶應義塾高等学校から4名を迎え無事に開催できました。テーマは「庄内に学ぶ『生命』—自然、戦争、信仰—」。参加者は、東山昭子先生と片山杜秀法学部教授から庄内出身で歴史に名を刻んだ女たち・男たちの生きざまについての講演を伺い、庄内での体験や社会情勢への想いを踏まえ連日議論しました。旧庄内藩主酒井家第18代当主酒井忠久様、藩校致道館富樫恒文様、先端生命科学研究所荒川和晴所長、約2500段の石段上りと修験体験を先導頂いた、いでは文化記念館の皆様、松ヶ岡開墾場でお迎え下さった大和匡輔様、早坂剛様、そして鶴岡市役所の皆様、行く先々で本当にお世話になりました。心より感謝致します。

(実行委員・経済学部 鈴木亮子)

体験の味を引き出す対話

日常を通じて得る様々な考えや感情を持ち寄り庄内の地に集まった私たちは、ここでしかできない体験に心動かされながら、感じるがままに言葉を発していました。その言葉に乗せるようにして、他の言葉がやってくる。そんな自由な対話は、言葉にして初めて自覚する感覚や、他者の考えを通じて見えた視点をかみしめさせてくれます。講師の方の言葉には、その方の経験や考えに由来する重みがあり、私たちは自然とさらなる議論を始めていました。

対話の循環を通して、持ち寄った想いや体験で得た感覚は重なりあって深められ、最終日には人生の軸となるような考えができていました。そんなかけがえのない対話を促すような要素が庄内には豊富にあり、庄内セミナーではそれらを全力で享受できる環境を提供していただきました。

(理工学研究科修士2年 山形智咲)



二重の意味で貴重な体験でした。

今回、私達は高校生として初めて庄内セミナーに参加させていただきました。私自身は生物学に興味を抱いており、先端研見学が一番の決め手でした。実際、セミナーが始まるとそれ以外のセッションから得られることも多かったです。特に、毎晩のグループワークであり話し合いの機会のない年上の大学生(院生)の方と、生命観、死生観、宗教等の日常生活では避けられるテーマについて語り合う経験は二重の意味で貴重でした。

最後になりますが、高校生の私達は大学生の皆さんから刺激を受け、セミナー全体の議論においても貢献することができました。このような経験を与えてくださり、感謝いたします。

(慶應義塾高等学校3年 岩崎壺栄)

春学期特定期間集中講座「身体知」

本年度(2023年度)の「身体知」は路上生活経験者のダンスユニット「新人Hソケリッサ!」の演出家兼ダンサーのアオキ裕キ氏を特別講師にお迎えしました。本年度のテーマは「変身」です。見えていないものは自分の周りにも自分の中にもあるはず。それを自分の中に取り入れて自分を変える、あるいは自分の中から取り出して可視化する、ということにその意味を込めました。そのために選んだ作品は、マレーネ・ボーノの「捧げもの」、夏目漱石の『夢十夜』から「第一夜」と『永日小品』から「蛇」、そして身体知ではおなじみのジョー・ミノの「囀る高麗鶯だったあの子」の4作品です。朗読と徹底的な議論によって、各作品は身体的なムーブメントを取り入れた朗読劇になったのみならず、人間が自然と一体化する、あるいは自然に憑依される「蛇」はアオキ氏の演出で力強い踊りに変身させることができました。本年度も最終日の8月19日には観客を迎えて発表会を行いました。

言葉による表現がどんどん短く希薄、かつ一方的になる時代に、時間をかけて言語表現を読み解く作業は、時代の趨勢に対する小さな抵抗です。しかし抵抗は人数が増えれば大きな力になり、ムーブメントになることを履修者の皆さん方は言葉と身体で教えてくださいました。

(横山千晶)

春学期授業報告

株式会社コーエーテクモホールディングス寄附講座「日吉学」

～日吉タイムトラベル、未来と過去への扉～

今年度の「日吉学」は、これまで日吉学の旗手であった不破有理先生が昨年度末で定年退職され、非常勤として参加、また新たに縣由衣子先生に参加してもらうことになりました。テーマもこれまで、縄文や戦争といった分野を限定した授業が多かったのですが、今年度は「日吉タイムトラベル」として、特定の分野に限定しませんでした。日吉や日吉キャンパスの建物や景観が、過去や未来へのタイムトラベルの入口になっているとして、それに基づいて各自で問題を発見し、日吉の過去や未来を描きだしてもらいました。

授業は、問題を自ら発見し、解決することをこれからの新しい教養と捉え、例年通り、前半は日吉や日吉キャンパスをフィールドワークして、それをもとにディスカッションなどのアクティビティを行いました。後半は、前半の活動で各自が発見した問題をより深め、最終的には5分間のプレゼンテーションと4000字のレポートに仕上げてもらいました。

今年度はテーマを限定しなかったこともあり、日吉の路傍の石仏や日吉の商店街の分布や綱島街道や鶴見川など、学生のレポートの主題が多岐にわたり、ユニークなものとなりました。

(大出 敦)



生命の教養学

文理横断・領域横断的な「教養」の見地から「生命」をめぐる問題に迫る本授業。2023年度のテーマは「贈与」でした。日本語では重々しい響きですが、英語で“gift”と言えば身近で、事実、人間、そして諸々の生命の日常にありふれています。そんな事象が、対他関係の基礎として近年ますます注目され、さらには、人間中心主義と利己主義という現代人の袋小路を抜け出す鍵として期待を集めている。そのことへの問題意識を共有しながら、11回のオムニバス講義と討議に臨みました。講師の専門は、行動経済学、アフリカ地域研究、進化生物学、西洋思想史、対照言語学、生物資源保全学、中国研究、菌学、ラテンアメリカ地域研究、英文学、北方文化研究とまさしく多岐にわたり、分野の代表者たちの知見を全体を通じて総合するという、「贈与の教養学」の類い稀な機会を得られました。学生の質疑への積極性は予想以上で、多くの講師から感嘆の言葉をいただいたことも付記します。

(石川 学)

株式会社アカツキ寄附講座「エンターテインメントビジネス論」

2023年度春学期に「エンターテインメントビジネス論」を実施しました。アニメやゲームを始めとしたエンターテインメントビジネスについて、理論と実務の双方から学際的・分野横断的なアプローチを行うというもので、2022年度に実験授業を実施し、2023年度から株式会社アカツキ寄附講座として、山下一夫(理工学部)がコーディネーターを務め、正式に開始した授業です。授業は全回を非常勤講師の中山淳雄が担当し、テーマパーク、映画、ゲーム、マンガ、スポーツといったテーマについての講義を行い、さらにテーマと関係するゲストスピーカーとの対談を行うという形式で進められました。ゲストスピーカーは毎回非常に豪華なメンバーで、毎回出席者と登壇者の間で活発な議論が交わされ、非常に満足度の高い内容となりました。また、今回の内容について纏めた書籍の刊行も予定しています。

(山下一夫)



日吉行事企画委員会（HAPP）企画（春学期）

新入生歓迎行事 上杉満代舞踏公演：『命』

【出演】上杉満代

【音楽】曾我傑・多田正美

【音響・照明】曾我傑

【挨拶およびポストパフォーマンス・トーク司会】

小菅隼人（理工学部教授）

2023年度は（2019年度に企画しながら、曾我傑の急病入院によって完全な形で実現しなかった）上杉満代、多田正美、曾我傑のコラボレーションによる舞踏公演を行いました。

大学アート・センターとの共催、慶應義塾高等学校の協力です。当日は、上杉満代の緊張感・躍動感を併せ持った踊りに、多田正美の力強い音楽と曾我傑の繊細な照明が見事なコラボレーションとなって、観客を魅了しました。ポストパフォーマンス・トークでは、会場からの質問やコメントを募り、高校生を含めて、非常に思索的で唆に富んだ発言が続きました。

日吉キャンパスにおける新入生歓迎行事は、1994年の大野一雄舞踏公演をもってスタートし、そのテーマである「心と体と頭と」は、今日までの重要なコンセプトとなりましたが、コロナ禍、ウクライナ戦争を経験した今日、このコンセプトは、さらに重要性を増しています。今回は、『命』の問題に「心と体と頭」において、正面から取り組む作品となったと感じています。この新入生歓迎舞踏公演は、コロナ禍における無観客映像配信での公演を含めて、日本を代表する舞踏家たちが出演し、毎年、大きな反響がありましたが、今回は、コロナ禍前と同様に、完全に観客を入れて実施しました。『命』と『多様性』をテーマにして、新たに大野一雄の直系の女性舞踏手を迎えて、この伝統を継続できたことは大きな成果でした。

（小菅隼人）



新入生歓迎行事ワークショッププレクチャー No.2 「ポストコロナを彩るメイク術」

【出演】松下里沙子+ 2名の学生モデル（文学部3年）

【コーディネーター】小菅隼人（理工学部教授）

【協力】古川晴彦（慶應義塾高等学校）／シュウ ウエムラ

コロナウイルス感染症の終息が見えてきた2023年春学期、マスクを外した新たな表現としてのメイク術を、メイク・アップアーティストの技術を通して考えるワークショッププレクチャーです。併せて、一流企業を退職して単身NYに渡り、夢を実現させたキャリア形成を学生に示すことで、自ら将来設計の手がかりを与えることを目的としました。当日は、約50名の参加者（塾生のみ、申し込み制）があり、まず、松下里沙子さんによって、パワーポイントを使いながら、学生時代から現在に至

るまでの自らのキャリア形成について40分の講義がありました。続いて、2人の学生をモデルに、メイクアップのワークショップが行われ、質疑応答の時間を30分とりました。昨年と比べて、男子大学生、男子高校生の参加が各段に増え、メンズメイクのトレンドを感じさせました。モデルは、男性と女性を1人ずつとしてジェンダーバランスに配慮しました。昨年のアンケートを活かして、今年は、顔を後ろのスクリーン映し出し、よりメイクの過程が分かるようにしたのが、非常に好評で、実際のメイク術への関心の高さを伺わせました。質疑においては、松下さんへのキャリア形成についての質問も多く、その点についても、学生の関心を伺わせました。

（小菅隼人）



鎌倉大仏の学際的調査と研究—鎌倉大仏と研究の「曼荼羅」

2023年5月20日 14:00～15:30（大会議室）。HAPPの新入生歓迎行事として、「鎌倉大仏の学際的調査と研究—鎌倉大仏と研究の『曼荼羅』」と題する講演会を、鎌倉大仏のある高德院住職の佐藤孝雄氏（文学部教授）を講師に迎えて行いました。

同氏は、遺跡から出土する動物骨や貝殻の分析を専門とする考古学の研究者。まさに文理融合の立場から、研究と住職を兼務しておられ、ご自身で示されたように、関連の学問は、大仏

を中心に、考古学・地理学・応用工学・地質学・地形学・生物学・気象学・地震工学・文化財科学・文献史学・美術史学・文学・美学・教育学と曼荼羅のように広がっています。我々は、鎌倉大仏の修理や周辺遺構の発掘を通じて鎌倉大仏の歴史を知ると共に、講師の歩みに学問の本来の姿を見る思いがしました。人間の歴史を顧みれば、文・理などと本来分かすべきものではないからです。

（企画：津田眞弓、日本文化研究会）



ライブラリーコンサート2023

2023年5月17日にジャズ、5月19日に弦楽四重奏のコンサートの日吉図書館で開催しました。本イベントは2016年度からの恒例イベントで、塾生にとって日常の空間である図書館で一流の演奏家の生演奏を聴けるという少し特別な体験を通して、音楽やコンサートに関心を持つきっかけを提供したいという思いから続けてきたものです。今回もその趣旨に賛同してくださ

たヴァイオリニストの本庄篤子氏、ジャズプレイヤーの井上智氏、土田晴信氏をはじめ、第一線で活躍する演奏家の方々が、曲間に解説も交えながら、初心者にも親しみのある楽曲の数々を披露してくださり、延べ200名を超える塾生・教職員が特別な時間を楽しみました。（日吉メディアセンター 今井星香）



日吉キャンパス公開講座「人生100年に備える」

2023年度の「日吉キャンパス公開講座」は前身の「横浜市民大学講座」から数え49回目の開催となり、10月21日から12月16日までの日程を組みました。統一テーマに沿った話題について、日吉キャンパスの教員を中心に研究機関としての義塾が持つ知的情報源を広く公開し、塾内外を問わず幅広い年齢層の皆様へ学んでいただくことを目標としています。2020年度はやむなく中止とし、2021年度は対面での実施にこだわりながらも定員を限定しましたが、2022年度は、ほぼコロナ禍前の定員としながらも、着席不可の座席を作るなど感染対策も実施しました。2023年度については、日吉で一番広い教室の使用は維持し、それ以外は完全にコロナ禍前と同様の運用とすることができました。

受講申し込みについては、募集開始から丸一日で定員に達し、早々に募集を締め切りました。

統一テーマを「人生100年に備える」とし、10講師（塾内7名、塾外3名）による各90分の講演が行われ、分野は文学・歴史・薬学・社会問題・芸術・趣味・情報・メディア・法律・語学・国際交流・生物・工学・データサイエンス・健康等、特定の分野に偏ることなく多岐に渡るようにしました。

講義日	講師	テーマ
10月21日 (土)	3時限目 迫 桂	エイジング、ライフコース、世代—文化の視点から
	4時限目 森吉 直子	グローバル社会における自己変容—異文化との向き合い方—
10月28日 (土)	3時限目 河野 礼子	人類進化から考える寿命と健康
	4時限目 太田垣章子	最期は皆おひとりさま—人生の後半戦をデザインする—
11月11日 (土)	3時限目 廣津留すみれ	ヴァイオリニストが見る音楽界の「現在」と「未来」—生演奏付き特別講演会—
	4時限目 玉置 妙愛	生き方・逝き方に向き合う—少し楽になるかもしれないご提案—
12月9日 (土)	3時限目 堀 里子	薬剤師と共創する健康人生
	4時限目 高山 緑	人生100年時代を生きる—生涯発達視点から—
12月16日 (土)	3時限目 満倉 靖恵	感情を見える化して本当の自分に気づく装置—感性アナライザ—の開発とその道のり
	4時限目 板垣 悦子	Let's enjoy life!

※公開講座は中止・延期となる可能性があります。

ス・健康等、特定の分野に偏ることなく多岐に渡るようにしました。

各回の講演者やタイトルは上表をご参照ください。また「日吉公開講座」で検索いただきますと、過去の実施分についても記載がございます。

(寺沢和洋)

<https://lib-arts.hc.keio.ac.jp/exchange/open/>

読書会「晴読雨読」

発想と書物を「持ち寄る読書会」始めました！

街の食堂が「冷やし中華はじめました」を掲げる季節、思いついて「アイデアの系譜学」というお題で、読書会を始めました。出発点となる「この一冊」から毎回のタイトルを設定し、参加者は「お題を見て連想した本、キーワード、話題、モノ」を持ち寄り、ワイワイ喋るという形式で進めています。初回（6月30日）は、「知の歴史をめぐる冒険」と題して、アイデアを論じる「学問分野」にどんなものがあるか、知の世界のマップづくりを試みました。日吉の学部1・2年生のみならず、三田所属の学部生、さらには大学院生や卒業生も立ち寄り、総勢14人の賑やかな会となりました。第2回（9月21日）は、「概念の整理収納、事典の東奔西走」と題し、アイデアを収集・分類・イン

デックス化する「辞書・事典」の思考フレームについて、辞書愛を原動力に探究しました。20人前後の参加があり、SFCの学部生が訪ねてきたり、ポスターをみた高校生がラテン語辞書の話をしにきたり、異分野の教員4人がクロス・トークをするなど、陽気な知的混沌に満ちていました。来往舎における人と人、知と知がふれあう「交差点」を目指して、今後も対面開催を継続します。学生だけでなく、先生方の参加も大歓迎ですので、思い立った折にぜひお立ち寄りください。

(若澤佑典)



未来先導基金

「みなさんmiraiプロジェクト」第一期

2023年度慶應義塾未来先導基金に採択された本プロジェクト。東日本大震災のボランティア活動を中心にした「慶應義塾・南三陸プロジェクト」(2011～2020年)を進化させ、キャンパスでできない研究と学びを、慶應最大の森がある南三陸町(宮城県)をベースに行います。今年度は8名の教員、岡田英史(常任理事/理)、奥田暁代(常任理事/法)、青木淳一(法)、井奥洪二(経)、植田浩史(経)、大平哲(経)、戸部真澄(法)と審査を経た20名の学部・院生が、南三陸町の現在を知ることを第一の目的として活動を行っています。具体的には、■5月15日18:15～20:15、公開シンポジウム(シンポジウムスペース)、佐藤太一氏(株)佐久・太齋彰浩氏(一社)サステナビリティセンター。■8月8日13:00～16:30、事前学習会

(シンポジウムスペース)、長沖暁子氏(旧プロジェクト代表)・遠藤健治氏(元副町長)。■9月8日～10日、南三陸合宿。バイオマス工場見学。森・南三陸杉関連講話、山内日出夫氏(南三陸森林組合)、小野寺邦夫氏(丸平木材(株))。佐久の森見学会、佐藤太一氏。わかめワークショップ、阿部民子氏。慶應の森登頂。震災関連講話、高橋長泰氏(元志津川小学校避難所自治会)。合宿後もさまざまな活動予定。

(HP) <https://lib-arts.hc.keio.ac.jp/minasanmirai/>

(津田真弓)



みなさんmiraiプロジェクト
(慶應義塾未来先導基金 南三陸プロジェクト)
9月8日(金)～10日(日) 宮城県南三陸町

創造力とコミュニティ研究会21
地域のアートNPOと、市民活動
9月26日(火) 18:30～20:00 カドベヤ

【学会・ワークショップ等開催支援】2023慶應・ウクライナセミナーⅠ・Ⅱ
1回目:10/11(水)、2回目:10/18(水)
3回目:10/25(水)、4回目:11/1(水)
5回目:11/8(水)、6回目:11/15(水)
7回目:11/18(土)
第1回目～6回目:18:15～19:45
第7回目:14:45～16:15
10/11及び11/18 日吉キャンパス
その他 オンライン開催

「現代ウクライナとその文学」
12月1日(金) 13:00～16:15
日吉キャンパス来往舎シンポジウムスペース

基盤研究 教養研究講演会no.9:
朴 憲郁「キリスト教の源流—イエスとパウロ—」
10月27日(金) 16:30～18:30
日吉キャンパス来往舎大会議室

【情報の教養学】第4回:東浦亮典「WISEなまちづくり」
11月8日(水) 16:30～18:00
日吉キャンパス来往舎シンポジウムスペース

教養の一貫教育Vol.8 舞踏家・今貂子による身体ワーク
ショップ「生きること 踊ること」
11月27日(月)、28日(火)15:30～17:30 日吉協育ホール

【選書刊行記念企画】著者と読む教養研究センター選書
第3回 不破有理
11月30日(木) 16:30～18:30
日吉キャンパス来往舎シンポジウムスペース

【学会・ワークショップ等開催支援】ワークショップ「ループ
リック活用のためのワークショップ&ディスカッション」
12月2日(土) 日吉キャンパススポーツ棟(予定)

【研究の現場から】第38回:橋宏亮
12月19日(火) 18:15～20:00 オンライン開催

【基盤研究】文理接続プロジェクト
第8回 論考完成に向けた発表3
2024年2月2日(金) 17:00～19:00 オンライン開催

【基盤研究】文理接続プロジェクト
第9回 論考完成に向けた発表4・総括
2024年2月23日(金・祝)午後 日吉キャンパス来往舎中会議室

9月

10月

11月

12月

1月

2月

【読書会】「晴読雨読」
第2回:若澤佑典「アイデアの系譜学 その②」
9月21日(木)14:00～16:00 日吉キャンパス来往舎小会議室

【基盤研究】文理接続プロジェクト
第5回:ワークショップ「エコロジー」論考の中間発表と議論
10月7日(土) 10:00～18:00
日吉キャンパス来往舎中会議室

「日吉学」特別企画「キャンパスの戦争～日吉台地下壕見学会」
10月17日(火) 16:30～18:00
日吉キャンパス来往舎大会議室及び日吉地下壕

【「学び場」プロジェクト】
10月16日(月)～2024年1月25日(木)日吉図書館1階スタディサポート

【情報の教養学】第3回:田中謙二「脳情報を光で取得する技術、脳情報を光で操作する技術」
10月18日(水) 16:30～18:00
日吉キャンパス来往舎シンポジウムスペース

【日吉キャンパス公開講座】人生100年に備える
1回目:10/21(土)、2回目:10/28(土)
3回目:11/11(土)、4回目:12/9(土)
5回目:12/16(土)
13:00～16:15 日吉キャンパスD101教室

【HAPP】新入生歓迎行事／
教養の一貫教育Vol.7 吉増剛造×檜垣智也×七里圭
11月1日(水) 15:15～17:30 日吉協育ホール

【基盤研究】文理接続プロジェクト
第6回 論考完成に向けた発表1
11月24日(金) 17:00～19:00 オンライン開催

【研究の現場から】第37回:アダム・コミサロフ「移民の社会的受入れに関するソーシャルマーカー」
12月8日(金) 18:15～20:00 オンライン開催

【基盤研究】文理接続プロジェクト
第7回 論考完成に向けた発表2
2024年1月12日(金) 17:00～19:00 オンライン開催

【学会・ワークショップ等開催支援】言語学を通して理解する異文化—日本手話と日本語でのコミュニケーション
2024年2月または3月 日吉キャンパス来往舎(予定)

【学会・ワークショップ等開催支援】次世代教育プログラムとしての社会的・情動的・倫理学的学習(SEE Learning)
2024年3月7日(木)～10日(日)
日吉キャンパス来往舎シンポジウムスペース(予定)
三田キャンパス東館ホール(予定)

※活動予定は中止・延期・変更となる可能性があります。

私の将棋自慢？

本年10月から保健管理センターの所長を拝命しました、広瀬 寛です。センターでの業務内容や過去の研究成果はさておき、私の自慢は「日本将棋連盟六段」であることです。

六段といってもアマチュアであり、プロの六段とは全くの段違いです。実力的にはアマ三段程度だと思いますが、学生の頃から長年やっていると恩赦みたいに昇段できることがあり、今に至っています。先日、葛飾区の将棋大会に出場したのですが、三段以上の部で4連敗してしまいました。もっぱら観戦するだけの「観る将」ではなく、実戦も積まないといけないな、と痛感しました。

この記事が出るころには、藤井聡太七冠が羽生善治七冠以来のタイトル全冠制覇(八冠)を成し遂げているかもしれません。10月10日現在、竜王・名人・王位・叡王(エイオウ)・棋王・王将・棋聖のタイトルを保持していて、残るは永瀬王座に挑戦する王座戦のみとなりました。いずれは八冠制覇するかもと期待はされていましたが、本当に順調にここまで来て、21歳の若さでこのまま制覇しそうな勢いです。この先は一体どうなるのでしょうか？

いずれ藤井七冠と同級生の伊藤 匠七段やさらに若い棋士達が出てきて、切磋琢磨が続くのでしょうか、10月11日永瀬王座に勝利して八冠制覇となりました。感無量です。

(保健管理センター 広瀬 寛)

